

江淹「雑体詩」の陶淵明

稀代 麻也子

はじめに

陶淵明（三六五〜四二七）作品の愛読者は、現在の日本（二〇〇九）にも多くいる。いわゆる「研究者」だけでなく一般からの受容も根強くあることは、陶淵明関連書籍の出版状況を文庫に限ってみるだけでもうかがい知ることができ^{（一）}。むしろ、作者名は忘れてしまったけれどどこかで出会った作品の一節が頭に残っていてそれが実は陶淵明の作品であるということもあるにしても、より多くの場合、「陶淵明」という作者の名はある一篇の、あるいは何篇かの作品や陶淵明にまつわるエピソードと結びついて、その人の心に想起される。陶淵明作品の読者には「陶淵明」なるものイメージが確かにあるらしいのだが、では、それは誰にとっても、いつでも、全く同じ確乎としたものなのかというと、そうではない。

本稿では、江淹（四四四〜五〇五）「雑体詩三十首」（『文選』卷三十一）から陶淵明に擬した「陶徵君 田居潜」（以下、「田居」と称する）を取り上げる^{（二）}。「雑体詩」の「序」には、「今作三十首詩數其文体（今三十首の詩を作りて其の文体に數^{なむ}ふ）」とあり、李善も「序」を節録するにあたって、その短い引用の中にこの十文字を略すことなく記している。陶淵明の「文体」を意識した江淹が陶淵明に「數^{なむ}」って作ったという「田居」を読むことにおいて、陶淵明の像はどのように結ばれ得るのか。「田居」は、陶淵明その人の作品として読まれたことがあったとしても不思議ではない作品であ

る。『陶集』の中には、詩作品の末尾に附載するという形ではなく、注によって保留をつけつつも「帰園田居」其六として卷二にとるテキストがある。江淹の擬作であるにもかかわらず、陶淵明の作品集に陶淵明の代表作のひとつである連作「帰園田居」の一首として竄入したことがある。「田居」という作品の分析を通して、「陶淵明の作品」なるものイメージは陶淵明その人の作品からのみ作り上げられるとは限らないことを確認し、ある作品がどのようにそれぞれの読者の中で像を結ぶのかについて知るよすがとしたい。

一、「帰去来兮辞」の語彙

「田居」は次のようにはじまる。

- ① 種苗在東臯 苗を種ゑて東臯に在り
- ② 苗生滿阡陌 苗生じて阡陌に滿つ
- ③ 雖有荷鋤倦 鋤を荷ひて倦むこと有りと雖も
- ④ 濁酒聊自適 濁酒 聊か自ら適せり
- ⑤ 日暮巾柴車 日暮 柴車に巾おほひするに
- ⑥ 路暗光已夕 路 暗くして光 已に夕べなり
- ⑦ 婦人望煙火 婦人 煙火を望み
- ⑧ 稚子候檐隙 稚子 檐隙に候つ

この八句に対し李善は九条を引くが、そのうちの五条までが陶淵明自身の作品、うち三条が帰去来である。『陶淵明集』における詩題を示し、文字に異同があるものについては附記しつつ抜き出せば、次のようになる。

歸去来日、登東臯以舒嘯。(「歸去来兮辞 并序」)

陶潜詩曰、晨興理荒穢、希自荷鋤歸。(「歸園田居六首」其三)「晨興理荒穢、帶月荷鋤歸」

又曰、雖欲揮手歸、濁酒聊自持。(「飲酒二十首 并序」其十九)「雖無揮金事、濁酒聊可恃」

歸去来日、或巾柴車。(「歸去来兮辞 并序」)「或巾巾車」

歸去来日、稚子候門。(「歸去来兮辞 并序」)

李善によれば、この八句のうちの「東臯」・「荷鋤」・「濁酒」・「巾柴車」・「稚子候」などは、陶淵明自身の作品からとられていることになる。橋川時雄『陶集版本源流攷』は、李善が一首全体で七条も陶淵明を引いていることについて、「田居」が陶淵明の句の切り貼りできた作であることを示すとす。

李善注此一首、七引陶句、亦可以知此首為雜綴陶句之擬作也。

(李善此の一首に注して、七たび陶句を引く、亦以て此の首の雜綴陶句の擬作なるを知るべきなり)。

橋川時雄はまた、使用される語彙・要素が『陶集』のものと同重なるというだけで陶淵明の作と間違える人がいると、鄭文焯を引くことよって指摘する。

世士以陶公寄情菊酒、又是詩有歸去来一語、率爾埒入陶集。

(世士は陶公情を菊酒に寄せ、又是の詩に歸去来一語あるを以て、率爾陶集に埒入せり。)

これは、「田居」と同じく、テキストによつては巻二に陶淵明の作として収載された「問来使」に関するコメントである。

爾從山中來 爾山中より来たり

早晚發天目 早晚 天目を發するか

我屋南窓下 我が屋 南窓の下

今生幾叢菊 今や幾叢菊を生ず

薔薇葉已抽 薔薇葉已に抽きんで

秋蘭氣当馥 秋蘭氣当に馥たるべし

歸去来山中 歸去来 山中

山中酒応熟 山中酒 応に熟すべし

蘇軾その他、後の時代の人が「田居」の次韻詩をなしたように、「問来使」についても陶淵明の作として受け取っていた人々がいた。この作品に関しては、「早晚」・「薔薇」の詳細な分析によつて、唐代になつてからの作であろうという論証がすでになされて⁽¹⁾いる。ところが、「問来使」を陶淵明の作であると受け取った人たちにとつて、「早晚」・「薔薇」が陶淵明の時代の作品に使われる語として不適切であるかどうかといふことは関心の対象外であつた。彼らは、「歸去来」・「菊」・「酒」といった語彙や要素が陶淵明の他の作品と共通するといふことをこそ取り出してこの作品を理解したことになる。同じように、「田居」を陶淵明の作として受けとる場合にも、「歸去来兮辞」や「歸園田居」や「飲酒」などといった作品に使用されるものと共通の語彙・要素が、「これは陶淵明の作である」といふイメージを結ぶ要因のひとつであつたと考えることができる。

李善は、「雑体詩」の三十首のうち、張綽(孫綽)・許詢・殷仲文・謝混・顔延之・王徽(王徽)・袁淑・謝莊・鮑昭(鮑照)・休上人(釈惠休)に擬した十首について、摸擬する作者の作を当該摸擬詩の部分で全く引かない⁽²⁾。一方で、陶淵明の七条と同じかそれより多く引くのは、潘岳・陸機・張協・盧湛・謝靈運の擬作に対してである。このことから、江淹が「雑体詩」を作るにあつて、必ずしも使用する語彙が摸擬対象の作品にあるかないかを問題とはしていなかつたことがうかがわれる。江淹が陶淵明の作を擬するにあつて、「歸去来兮辞」や「歸園田居」や「飲酒」といった作品と共

通する語彙を用いたということは、これらにこそ陶淵明作品の本質があるとみなしていたことを示唆する。

鍾嶸（『詩品』中）は、陶淵明の作品に陶淵明その人の徳をみていた。

每觀其文、想其人徳。世歎其質直、至如「歎言酌春酒」、「日暮天無雲」、風華清靡、豈直為田家語耶。古今隱逸詩人宗也。

（其の文を観る毎に、其の人徳を想ふ。世は其の質直なるを歎ずるも、「歎言酌春酒（歎言して春酒を酌む、「読山海経」其一）、「日暮天無雲（日暮天に雲無し、「擬古」其七）」の如きに至りては、風華清靡、豈に直だに田家の語を為すのみならんや。古今隱逸詩人の宗なり。）

鍾嶸のようなとらえ方は、「田居」においても可能である。『宋書』の陶淵明伝（卷九十三 隱逸伝）で陶淵明その人の生き方における志の高さを示す伝記史料として「帰去來兮辭」（辞のみ）が引かれていることが合わせて想起されるならば、「田居」の詩句中に用いられた語彙・要素を越えて、陶淵明という隱逸伝中の人のイメージが作中に投影されていると受け取ることになる。

二、「飲酒」其五の「問君」

「田居」は、最初の八句で満ち足りた生活を描写したあと、疑問の辞を發する。

⑨問君亦何為 君に問ふ亦何為れぞ、と

⑩百年会有役 百年会ず役有り

「役」の典故として李善は「辛丑歲七月赴仮還江陵夜行塗中一首」の「懷役不遑寐（役を懷ひて寐ぬるに遑あらず）」を引くが、ここでは公役を意味する使い方になる。たしかに、陶淵明が詩文中で使った「役」という語の大半は公役にか

かわる「役」である。

自古歎行役 古より行役を歎ず（「庚子歲五月中從都還阻風於規林二首」其二）

遙遙從羈役 遙遙 羈役に從ふ（「雜詩十二首」其九）

驅役無停息 驅役 停息無し（「雜詩十二首」其十）

勉勵從茲役 勉勵して茲の役に從ふ（「乙巳歲三月為建威參軍使都經錢溪一首」）

心憚遠役 心 遠役を憚る（「歸去來兮辭 并序」序）

皆口腹自役 皆 口腹もて自ら役す（「歸去來兮辭 并序」序）

「歸去來兮辭」本文の冒頭近くにある次の「役」も、意味するところは公役に歸する。

既自以心為形役 既に自ら心を以て形の役と為す（「歸去來兮辭 并序」辭）

公役に関わらないものとして、引越しの労働をさすものが一例ある。

今日從茲役 今日 茲の役に從ふ（「移居二首」其一）

もう一例、公役に関わらないものとして、「疏」における動詞としての用例ではあるが、田園における生活で強いられる労働を指すものもある。

役柴水之勞 柴水の勞に役せらる（「与子儼等疏」）

「田居」の「役」は、広く公役と私的な労働とを包含するものではあっても、①～⑧および後述の⑩～⑭に接続して読めば、私的労働、特に田居の生活において強えられる肉体労働を指すことは明らかである。

「人間は働かなければならないものなんだ」という⑩の答えは、⑨の「一体どうして（①～⑧のような生き方を）するのだ」という問いに対するものである。

「問君」は、陶淵明が母方の祖父である孟嘉を顕彰するために書いた伝で使われるように、誰かが君にたずねるとい
う問答のために用いられるが、劉良が説明するように、「田居」では自問自答の辞として使われている。

良曰、問君、謂自舉以問以答也。何為辛苦。答云、人生百年皆有勞役。

（良曰く、君に問ふとは、謂へらく自ら挙げて以て問ひ以て答ふるなり。何為れぞ辛苦せる、と。答へて云はく、
人生百年皆勞役有ればなり、と。）

陶淵明の詩で「問君」を自問自答として読めるように使っているものは二首残る。

結廬在人境 廬を結びて人境に在り

而無車馬喧 而も車馬の喧しき無し

問君何能爾 君に問う 何ぞ能く爾るやと

心遠地自偏 心遠ければ地 自ずから偏なり

採菊東籬下 菊を採る東籬の下

悠然見南山 悠然として南山を見る

山氣日夕嘉 山氣 日夕に嘉く

飛鳥相与還 飛鳥 相い与に還る

此還有真意 此ここに還た真意有り

欲弁已忘言 弁せんと欲して已に言を忘る（「飲酒二十首」其五）

張銑は、ここで使われる「問君」について、やはり自問自答であると解釈する。

銑曰、問君何能如此者、自以發問、將明下文也。

(銑曰く、君に問ふ何ぞ能く此くの如しとは、自ら以て問を發し、將に下文に明らかにせんとするなり、と。)

注目すべきは、「飲酒」其五におけるこの問いは、確乎とした答えが用意された上で發せられているということである。自分の心が幽遠であるから外界が騒がしくてもまるで僻地にでもいるかのように心は静かにしていられるのだという答えは最初から用意されているのだ。詩はさらにその静かな境地を具体的に詠いあげていく。この作品に迷いはない。「問君」は答えを探したくて發している問いではなく、確乎とした思いを自分で再確認し味わうための問いである。

辞家夙嚴鷺 家を辞して夙に鷺を嚴へ(旅支度をして)

当往志無終 往くに当たりて無終(県名、今の河北省薊県)を志す

問君今何行 君に問ふ今何ぞ行くと

非商復非戎 商(商売)に非ず復た戎(戦争)に非ず

聞有田子春 聞くならく田子春(人名、田疇)有り

節義為士雄 節義 士の雄たり

斯人久已死 斯の人久しく已に死するに

鄉里習其風 鄉里 其の風に習ふ

生有高世名 生きては世に高き名有り

既没伝無窮 既に没して伝ふること窮まり無し

不学狂馳子 学ばず狂馳子の

直在百年中 直だ百年の中に在るのみなるを(「擬古九首」其二)

ここで使われる「問君」もまた、確乎とした気持ちを示すためのものである。「どうして無終の地などへ今いくのか」と

いう問いは、その地で曾て後漢末にたくましく生き抜いた田疇という人物に対する強い憧れを述べるためになされている。そして、最後の二句で遠謀もなくただあくせくと生きる人々に影響されることがなかった田疇の素晴らしさを確認し、自分もまたそのように生きるのだという強い思いを示唆して結ばれる。

「田居」における「問君」も、「飲酒」や「擬古」と同じく、ゆるぎない思いを述べるきっかけとして使われている。生活の為に汗を流して働くことは、人が生きようと思えばしなければならぬことなのだ、と。そして⑪～⑭（後述）で自分の気持ちの原点を言葉によって捉え、満ち足りて生きている自分を味わう。

①～⑧で田居における日常の生活が描写されたあと、⑨～⑭でそのような生活をこそ自分が望んでいることの再確認がされる。「問君」という結節点があることによって、「田居」という作品が、自分に対するゆるぎない確信のもとに詠われたものとしてイメージされることになる。

三、「帰園田居」の構造

「田居」は、自分の気持ちの核にあることを言葉にして結ばれる。

⑪ 但願桑麻成 但だ願ふらくは桑麻成り

⑫ 蚕月得紡績 蚕月 紡績を得んことを

⑬ 素心正如此 素心 正に此くの如し

⑭ 開徑望三益 徑を開きて三益を望む

「開徑望三益」は、「歸去來兮辞」の「三徑就荒、松菊猶存（三徑荒に就けども、松菊猶ほ存す）」を連想させる言葉の使い方であり、そうであれば、「歸去來兮辞」で李善が引く『三輔決録』の、蔣詡が清廉である羊仲・求仲とのみ交わつ

たという話を典故として用いていることになる。呂向は「田居」の「三益」について、そのように解釈している。李善は、蔣詡の話を典故とする謝靈運の「田南樹園詩」を引くと同時に、『論語』（季氏）も引く。

益者三友、友直、友諒、友多聞、益矣。（益者三友、直を友とし、諒を友とし、多聞を友とするは、益なり。）
率直で、誠実で、多くを聞いた中から大切なことだけを言葉とする^{十三}ような、そういう人たちこそ自分を益する友といえる。

「田居」には、李善が指摘するように、「帰園田居」其二で使われる語彙が含まれる。

野外罕人事 野外人事罕に

窮巷寡輪鞅 窮巷輪鞅寡し

白日掩荆扉 白日荆扉を掩ひ

虚室絶塵想 虚室に塵想を絶つ

時復墟曲中 時に復た墟曲の中

披草共来往 草を披きて共に来往す

相見無雜言 相見ても雑言無く

但道桑麻長 但だ道ふ桑麻長ずと

桑麻日已長 桑麻日に日に長じ

我土日已広 我が土は日に日に広し

常恐霜霰至 常に恐る霜霰至り

零落同草莽 零落して草莽に同せんことを

人との往来はほとんどない中で、数少ない交流のあり方は、「相見無雑言、但道桑麻長」、自分たちにとって本当に大切なことだけを話すというものである。田居生活の中で大切なことは、桑や麻が無事に成長してくれるか、なのである。もしも冷害によつて麻や蚕の餌である桑が駄目になってしまったら、と常に恐れることになる。「田居」でも「帰園田居」其二と同じように桑や麻の健やかな成長を願っているが、恐れについては言及しない。時が来たときに蚕の繭から絹を紡ぎ、麻布が織れる状態にできるよう一心に祈る。

「田居」や「帰園田居」其二と同じように、李善が③の典故として一部を引いた「帰園田居」其三も躬耕を詠つたものである。

種豆南山下 豆を種う南山の下

草盛豆苗稀 草盛んにして豆苗稀なり

晨興理荒穢 晨に興きて荒穢を理め

帶月荷鋤歸 月を帯び鋤を荷ひて歸る

道狭草木長 道狭くして草木長じ

夕露沾我衣 夕露 我が衣を沾す

衣沾不足惜 衣の沾ふは惜しむに足らず

但使願無違 但だ願ひをして違はしむる無からんことを

朝から晩まで働いて折角豆を植えつけても雑草ばかりが元気に育ってしまう農作業の大変さが描かれる。夜になって帰ろうとすると、服が夜露に濡れてしまうという泣きたいような状況の中でも、決して自分は挫けない、と悲壮感すら漂う。同じように躬耕の様子を詠つていても、「田居」とはかなり雰囲気が違う。「田居」①②では、植え付けた苗は元氣

にたなびいている。たとえ農作業に疲れを感じることがあっても、お酒が紛らしてくれることがわかっている。日が暮れて帰る先にあるのは我が家の光と炊事の煙、そして自分の帰りを待つ幼子。「田居」では、大変には違いないけれど気持ちは満ち足りている生活を営むという目線で躬耕を描き、肉体労働を好ましいものとして受け入れている。

「帰園田居」其二は桑麻が無事に育つかを心配し其三は農作業の大変さをうたうが、其四でうたわれるのは農作業の苦しみではなく、人間の人生が永遠ではないという冷たい現実を思い知った苦しみである。久しぶりに山沢の遊びに出かけてみると、かつては確かにそこに人間が生活していた痕跡があるのに、荒れ果てている。一体みなどこへ行ってしまったのか。

借問採薪者 借問す薪を採る者に

此人皆焉如 此の人皆焉くにか如くと

「飲酒」や「擬古」や「田居」の問いとは違い、この問いに対する答えは予め用意されてはいない。わからないからきいてみた問いに対する答えは、皆すでに死んでしまったという絶望的なものであった。

人生似幻化 人生は幻化に似たり

終当帰空無 終に当に空無に帰すべし

人生の有限を思い知り、無常観をもって其四は結ばれる。

同じように園田の居における生活を描きながら、「田居」にはゆるぎない満足感があらわれていて、「帰園田居」其二・其三・其四には動揺する様子があらわれている。其二・其三・其四に対して、其一と其五には動揺から落ち着きへとこの気分の動きがみられる。其一では「誤落塵網中（誤りて塵網の中に落つ）」と感覚される俗世間から「復得返自然（復た自然に返るを得たり）」と、園田の居に帰ってきたことがうたわれる。其五は「悵悵独策還（悵悵 独り策つきて還る）」

と、其四の衝撃に嘆きながら帰途につくところからはじまるが、溪流の水で「遇以濯吾足（遇たまて吾が足を濯）」ったことよって気分が上向き、新酒で宴会を開くと「飲来苦夕短（飲び来たりて苦だ夕べ短く）」あつという間に夜が明けてしまう、と悲しみから回復していく様子がうたわれている。「帰園田居」を全五首の連作とみた場合、其一には迷いから帰園へという心の動きがあり、其二から三にかけては躬耕生活の大変さを思い知っていくという心の動揺があり、其四には有限の生の認識という心の動揺があり、其五には苦しみからの回復という心の動きがある。このように、「帰園田居」は五首でまとまりのある連作として成り立っていると見える。

ところが、完結しているはずのこの五首にさらに「田居」を其六として加えた場合、「帰園田居」は「飲酒二十首并序」や「帰去来兮辞 并序」と通底する特徴をもつことになる。「飲酒」其五と其七とは、この連作が心の激しい動揺の中で紡ぎ出されていく中で、奇跡のようにして生まれた一瞬の境地を表現したものであつた。^{十四}「飲酒」は本文の二十首が激しい気持ちの振幅の中で書かれているのに対し、序はある種のゆるぎなさをもっている。「帰去来兮辞 并序」では、辞の部分が確乎とした気持ちのもと一直線に帰って行くのに対し、序では迷いふらふらする心が表現されている。「田居」は、「帰園田居」という連作の中に置いた時、他の部分の動揺に対するゆるぎなさを感じられるという意味で「帰去来兮辞」の辞・「飲酒」の序にあたる役割を果たすことになる。また、「田居」だけを取り出して読んだ場合は、「飲酒」において其五や其七だけを独立した作品として読む時のような、満足した境地を表現しているものとして陶淵明の作品としての像を結ぶことになる。

おわりに

江淹「雜体詩」において、陶淵明に擬した作には「田居」という二文字が与えられている。「帰去来兮辞」や「帰園田

「居」を強く意識させる作であること、また、「雑体詩」が与える二文字の第一文字を動詞として読み得るものが三十首のうち二十首にもおよぶことを考えれば、陶淵明に擬した作が「帰田」であつてもよきそうである。それなのに何故「田居」なのか。それは、この作品の核が「帰」という動詞にあるわけではないからである。「帰園田居」の核は、園田の居に帰る時と帰隠してからの心の動揺にある。また、「田居」を「帰去来兮辞」の辞と対比してみると、「両者のゆるぎなさには実は決定的な違いがある。「帰去来兮辞」の辞はゆるぎない確信のもとに言葉が紡がれていて、そこに描き出される姿は極めて動的である。まっすぐに帰っていく時のはやる気持ちも、帰るために移動する距離も大きい。それに対して「田居」は、農耕生活における平凡な日常を、自分の耕作地と家という限られた空間におけるものとしてゆるぎない気持ちとともに描写する。「田居」に描かれているのは「帰」という動きではなく、「帰」のあとに始まった田居での実生活における満ち足りた気分なのである。

『陶集』に竄入したものであつて陶淵明自身の作品ではない「田居」は、しかし、陶淵明作品の特徴を多く備えている。使われている語彙、詩の展開の仕方、連作として扱う場合の役割の担い方など、陶淵明の他の作品と並べて必ずしも違和感を覚えない。「田居」を読む者は、濁酒や農耕する姿や陶淵明の気高い心持ちや満ち足りた境地などの中から、その時々々に反応するいくつかの要素を取り出す。そして、取り出したイメージの断片の数々が像を結ぶところに、一瞬、「田居」という陶淵明の作品が浮かび上がる。その残像が読者の心からいつまでも消えない時には、今度はその残像のなかのイメージが断片となつて他の陶淵明作品の像を浮かび上がらせるための素材となる。

いかにも陶淵明らしい作品が実は陶淵明その人が書いた作品ではないことがあり得るし、その作品が次の陶淵明らしさを生み出す素材となることもあり得る。書いた側の事情、伝本の事情、読む側の事情。個人も社会も含みこんで変幻自在に出現するある一篇の作品の世界は、そのようにして変幻自在に出現しつづける中で、確乎たるその作品らしさと

いうものを読者に感じ取らせるのかもしれない。

注

- (一) 岩波文庫の『陶淵明全集 上下』（一九九〇年第一刷）は、現在も版を重ねている。媒体をかえて何度も出版されている吉川幸次郎『陶淵明伝』はちくま学芸文庫に入った。角川書店は、曾ての「鑑賞 中国の古典」シリーズをさらに初心者向けにした角川ソフィア文庫の「ビギナーズ・クラシックス 中国の古典」シリーズとして『陶淵明』を出版した。また、NHKライブラリーではあるが、放送用テキストに基づいて再編集した『漢詩をよむ 陶淵明詩選』も二〇〇七年に出版されている。
- (二) 本稿では、『文選』は『日本足利学校蔵宋刊明州本六臣注文選』（人民文学出版社、二〇〇八年）、『陶集』については汲古閣旧蔵本『陶淵明集』（『中華再造善本』、北京図書館出版社、二〇〇三年）を底本とし、適宜諸本を参照する。
- (三) 南宋の湯漢や清の陶澍などは、第四卷末に附載する。現在、新たに出版されている書籍においては、専門書の場合には袁行霈『陶淵明集箋注』（中華書局、二〇〇三年）などのように参考資料として収めることもあるが、陶淵明の作ではないとして除外されるのが一般的。
- (四) 宋刻通修本であり現存する『陶集』の中で最古の面目を今に伝えると目される汲古閣旧蔵本、四部叢刊にも収められ多くの人に利用された元の李公煥箋註本など。
- (五) 「田居」の残りの部分について李善が引く陶淵明作品は、「辛丑歲七月赴仮還江陵夜行塗中一首」（陶潜夜行塗中詩曰、懷役不遑寐）と「帰園田居」其二（陶潜詩曰、相見無雜言、但道桑麻長）とである。
- (六) 『文字同盟』所収（汲古書院、一九九一年）。『陶集版本源流攷』はもと一九三一年七月北京発行。
- (七) 『陶集鄭批録』、前掲『文字同盟』所収。橋川時雄校補の『陶集鄭批録』は一九二七年八月序刊。

(八) 北宋の蘇軾は、「田居」に和した作で、陶淵明を慕わしい憧れの人として使うことよって自分自身について述べる。「昔我在広陵、悵望柴桑陌。長吟飲酒詩、頗獲一笑適。當時已放浪、朝坐夕不夕。矧今長聞人、一劫展過隙。江山互隱見、出沒為我役。斜川追淵明、東臯友王績。詩成竟何為、六博本無益。」(「和陶歸園田居六首」)

明の周履靖は「田居」に和した作で、「田居」に用いられる語彙を使いつつ、雨が降って水田が潤ったり、豆を煮たり、着物の素材ができたりと、帰田のよさを具体的に描写しようとする。「雨過豆苗肥、新水盈南陌。歛然茆茨下、開樽情自適。傾倒樂妻孥、醜淘已終夕。身世等浮漚、流光駒過隙。嗤彼世途人、空將幻軀役。豆熟得炊餐、桑長得糸績。塵事更紛忙、歸田誠有益。」(「和歸園田居六首」)、『五柳廢歌』卷一)

明の黃淳耀が「田居」に和した作では、やはり帰田の良さをいうが、「田居」の世界によりそうものではなく、そのような生活の場面場面を切り取って示すことよって、帰田がいいものであることを説明する。「吳山如好女、姿態浮綺陌。往買二頃田、飲河心易適。梅開玉雪眩、楓落霧雨夕。五湖白浩浩、攪取入簷隙。花鳥吾友于、文賦爾僕役。野老課耕牧、家人勤紡績。此意信悠哉、夢游果何益。」(『陶庵集』卷十)

(九) 元の留因「代來使答淵明」では、「問來使」の最初の二句に答え、さらに、陶淵明の一番の関心は秋蘭や薔薇にではなく酒にあるとする。「何時發天目、山中雲出時。出山山更佳、草木非所知。公田幸有秫、何問菊与薇。一笑領此意、翁豈為酒歸。」(『静修集』卷十三)

明の周履靖の和詩では、「問來使」にはあつた薔薇や秋蘭は除かれ、新たに身近な食べ物に加えられている。「健足至中庭、詢彼來天目。孤雁度哀声、東籬綻黃菊。白雲滿徑間、甕中酒初馥。对菊試新蕪、園蔬煮令熟。」(「和問來使」)、『五柳廢歌』卷三) また、唐の李白は、「問來使」を自分の作品の典故として使つて結ぶことよって自分の感慨を表現している。「何処聞秋声、脩脩北窓竹。迴薄万古心、攪之不盈掬。静坐觀衆妙、浩然媚幽独。白雲南山來、就我簷下宿。嬾從唐生決、羞訪季主卜。四十九年非、一往不可復。野情轉蕭散、世道有翻覆。陶令歸去來、田家酒心熱。」(「尋陽紫極宮感秋作」)

(十) 「結局、この詩は、淵明の著作ではなく、おそらく唐代に陶詩を模倣した、いわゆる「効陶詩」の一つであり、それが南唐時

代、誤って『陶淵明集』に混入されてしまったと考えるのが現時点においては、もっとも妥当であろう。」(井上一之『陶淵明集』所収「問來使」に関する一考察——詩的言語における時代性」、早稲田大学中国文学会『中国文学研究』二二、一九九五年一二月)

(十一) ただし、鮑照については、「已見上文」という形で「結客少年場行」が引かれている。

(十二) 『三國志』卷十一の田疇伝には「田疇字子泰、右北平無終人也。」とあるが、『後漢書』卷七十三の劉虞伝の注に引く『魏志』は「疇字子春、右北平無終人。」とする。

(十三) 『論語』(為政)に「多聞闕疑、慎言其餘、則寡尤(多聞にして疑はしきを闕き、慎みて其餘を言へば、則ち尤寡し)」とある。

(十四) 拙稿「『飲酒二十首并序』の陶淵明」(『中国文化』六六、二〇〇八年六月)、「帰去來兮辞并序」の解釈に関してはその注⑭参照。

(十五) 「從軍」・「詠扇」・「贈友」・「感遇」・「懷德」・「言志」・「詠懷」・「離情」・「述哀」・「羈宦」・「詠史」・「苦雨」・「傷乱」・「感交」・「遊仙」・「遊山」・「侍宴」・「贈別」・「養疾」・「從駕」。

(筑波大学大学院人文社会科学研究所)